



# 陽気だより

昭和32年7月号から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で65年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返ってまいります。



## 私が天理教に

## 求めるもの

摩尼清之

(昭和三十二年当時  
NHK社会部記者)

天理教と私の因縁もかれこれ五十年になります。といって私は天理教徒ではありません。私は寺の一人息子に生まれました。ところが私は天理教信者の大原女乳母の胸ではぐくまれました。それで天理教にぶつかると乳母の慈愛の温かさがよみがえってくるのです。

病気にでもなると、よく御神水を飲まされました。乳母は寺の子供である私に対して天理教の教育をしませんでした。しかし、いつの間にか私がかみかぐらうたを上手に唱えるようになっていたのが嬉しうが、しかし五十年後の今でもうたうメロディーが私の体から消え去っていないところ

をみると、幼心に染み込んだ影響の根深さを痛感させられます。乳母は無学でした。しかし、全くの善人でした。私の生涯を通して彼女のような良い人に育てられたということほど気持ちのよい感情はありません。そういう意味では乳母の母乳を通して私の体に天理の教えが入っているのかもしれない。

何にしても、すべてが懐かしい思い出です。しかし考えてみると、天理教も年をとりました。私は戦後のいわゆる新興宗教をしばしば訪ねますので、いつしか天理教にもようやく一抹の古色が目につくようになりました。

もちろん、戦前の社会の圧迫がとれて、戦後天理教はは

つらつと大発展したことも、そして、その信仰のいきいきとしていること、教団活動の清新さなど、ひそかに感嘆しています。

しかし、一面どこかに古めかしさが感ぜられるようです。もちろん、それは教団の基礎が固まって、天理教の眞面目がいよいよ展開する段階に入ったことになるのでしょう。感情的な言い方で恐縮ですが、しかし天理教の既成化と固定化には何か一抹の淋しさを覚えるのです。

おそらく天理教信者の方には、こんなことを申し上げると、お笑いになると思いますが、まあ素人のやぶにらみとして受けてください。

もっとも、編集者は、そういうことを万々承知の上で第三者の私たちにこういうことを書けというのですから、これは大変な知恵者なんです。ですから、その知恵者に応えるためにも少々やぶにらみを書かせていただくわけです。

一昨年の暮れ、日本最大の宗教施設としてのおやさとかた竣工式には私も参列させていただき、天理教教団の強さに感嘆しました。そして、

その強大な教化力はヴァチカンを思わせるものがあります。しかし私は乳母の家が天理教に転宗した事情を思い出しました。彼女の家は天台宗の名刹三千院門跡の寺侍の家柄でした。それが仏壇を焼き位牌を川に流して天理教に改宗しました。家はひっそくして土蔵の白壁が印象に残っていました。改宗にはよほどの勇氣が必要だったことでしょう。

しかしまた、それだけに、いきいきとした信仰の深さと喜びはどんなにか素晴らしいものだったでしょう。そうして幕末以来、徳川の宗教政策で日本の宗教ががんにがらめに縛り上げられて教団は形式化し、国民の宗教心は全く干からびていたところへ、干天の慈雨の如く、教祖の信仰の恵みに接した人々の喜びは、果たしていかばかりであったろうかは、想像するに余りあるものがあります。

信仰に目覚めた人々が、因習を越え、生死を越えて神の声に走ったは当然であります。しかしまたそれだけに、教祖はもちろん教団の人々が未信者の心の奥底へそくそくと浸透する信仰力の偉大さを

想像せざるを得ません。

戦前の日本社会の環境の中で、しかも求道者が全国に広がっていったあの明治、大正時代の浸透力を保持してもらいたいものです。

この信仰の浸透力が失われると、どんな盛大な行事も単なるリクリエーションないしは自慰行為にしかならないでしょう。

教団の組織が巨大化し機構が複雑化するにつれて、形式化し官僚化しがちです。そして教団が成長すると神学が必要となつてきます。当然のことです。

しかし、ここで私がお尋ねしたいことは、せっかく苦勞して体系化された神学がキリスト教神学や仏教哲学のイミテーションに陥らないかという疑問です。

仏教が宗教本来の人間救済の面目を忘れて観念論の邪道に迷い込んだが百年目、ついに老いさらばえて今日の姿となった哀れさを見てやって下さい。

私が天理教に感心している一事に、ことばの問題があります。ことばによって神の道が述べ伝えられる以上は、こ

とばはそのものずばりであつて、決して銜いや虚飾があつてはならないはずで

その点、教祖以来天理教は、宗教用語に関しては最も勝れた宗教だと私は信じています。しかし、せっかくこの勝れた用語も時代の変遷と共に次第に時代感覚から浮くようになりつつあります。

宗教にありがちな保守性から、新語に生命の置き換えをしませんと、死語と共に教えの生命まで殺してしまう結果になるでしょう。

いずれの宗教でも、本当の宗教は冷厳なものです。甘さと愚かさによろまかされると、それでお陀仏です。

国家があつて社会がないといわれる日本で、本願寺と共に天理大神を中心に信徒間に社会を構成して人間を磨き、その生活を規制してきた天理教の社会的存在の素晴らしさに感心するものですが、敗戦と共に消え去りつつある家族制度と個人主義への移行に、天理教がどう対処されるか、二十年後、今日の学童生徒が社会人となるころの社会への天理教の展開が期待される次第です。

## 『陽気』定期購読

お店まで買いに行くのが大変。忙しくて購入し忘れた。定期購読はそんな手間を省きます。毎月20日前後にご自宅宛に発送いたします。(例：6月号は5月20日)まずはお問い合わせください。定期購読料金 1年分…3,420円 (送料込)



購読に関する問合せ先 ☎ 0120-920-398 養徳社 業務部窓口

目下制作中

七月発行予定

マンガ おひや許し

作画：金巻たけじ

図書出版 養徳社 フルカラー 予価：200円

22年ぶりの大幅加筆!

## 養徳社の一押し書籍

信仰するということは、教えを頭で理解すればいいということではありません。日々の生活を教えにのっとって律することです。それを具体的な生活の場面を通して提示したのが本書です。



「改訂増補」篠田欣吾著  
**ココロの道**  
さんぽ道

¥1,296円 (税込)

青山文治著  
**思い出のスケッチ**  
―伝道ゆかりの地めぐり―

絵と文で甦る、伝道ゆかりの地。教祖のお姿と先人の白熱的な信仰。

¥1,512円 (税込)

松宮 守著  
**生き方メッセージ**  
信仰低迷の一因は思考力の低下

社会事象や事件、寓話を通して、たしかな信仰へと突き進む、見方・考え方。

¥864円 (税込)

榮嶋憲和著  
**幸せを呼ぶ言葉**  
目の前の悩みや不足不満が消えれば

心に喜びがわき、幸せの輪が広がってくる。この世に生きる歓喜と素晴らしさを呼びさます。

¥756円 (税込)

道の教理を「誠一つが天の理」「二一つが天の理」「順序一つが天の理」成ってくるのが天の理」の四つのワケ組みに整理することで「たすけ」のメカニズムが鮮明になってくる。

中臺勘治著  
**人間がたすかる原理**



¥1,404円 (税込)

※ご注文は前払いとなりますので定価に送料を加算して郵便振替にてご注文下さい。送料200円 図書出版養徳社 業務部窓口 ☎ 0120-920-398

Facebook で最新情報をチェック! <https://www.facebook.com/yotokusha>

この「陽気だより」を支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。  
＜書籍・陽気のご購入方法について＞前払いをお願いしております。お近くのゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙をお使い頂き、[住所、氏名、電話番号、書名(陽気希望月号)、冊数]を明記の上(振替口座番号00990-3-17694番 加入者名(株)養徳社)へご送金ください。手数料はお客様負担となります。ご入金を確認後、速やかに商品を発送させていただきます。ご不明な点は養徳社までお問い合わせ下さい。フリーダイヤル0120-920-398 養徳社 業務部